

中世思想史における天地創造説の位置

辻田 右左 男

【要約】 創造記と名付けられる旧約聖書冒頭の天地創造説話は、それ自身偉大な文学作品であるが、近代以前のヨーロッパ人には、その信仰生活の支柱、かつ科学的宇宙観の源泉でもあつた。特にキリスト教神学が支配的であつた中世においては、この説話の人心にもたらした影響は大きく、創造神への信仰は、同時に被造物としての人間の位置の認識を呼びました。かりに被造物意識とよぶこのような自覚は種々の形で捉えられるが、全体として、中世の精神をつつましいものとするに役立つた。目に見えない思想の細流であるが、これがどのようにして中世の社会を流れていつたかを跡づけようとするのがこの小論の目的である。しかし順序として創造記がいかにして成立し、いかなる構造をもつかを明らかにするために近隣諸民族の類同神話とも比較し、かつ中世に至るまでの創造記を中心としたヘブライ宗教の変遷をたどり、ギリシア思想との融合の形でカトリシズムが形成される過程を述べた。

序

思想史の上から見た中世は、神秘の霧に包まれた山中の静かな湖水にもたとえられる。前時代のさまざま思想の流れがここに注ぎこみ、融合し、^②浄化され、ふたたび数本の川となつて近世へ流出した。統一 unity、融合 blend

そして伝達 transmission^③ は中世という湖水の重要な機能であつた。しかし中世湖は前時代のすべての要素を清濁合せ呑んだわけではない。そこには、おのずからなる選別が行われた。古代を限りとして中世湖に達しなかつた思潮もあるし、またここに起源して近世へもち運ばれたものもある。

中世へ流入した多くの流れのうち、さらに比喩をつづけるならば、オリュンポスの嶺に発したものと、シナイ山上に発した流れとは、いともくつきり湖面の色を染め分け、やがて融合同化して中世湖に明瞭なカトリシズムの性格を与える。ここにシナイ山上からと呼んだのは、いうまでもなく、中世に吸収されたオリエントの思潮中、最もごちなく生硬なヘブライ主義を指し、オリュンポスの嶺から発するものとは、終始一貫人間の知性を追究していつたギリシア主義を指している。

この二つの流れは紀元前からすでに東部地中海地域で顕著に見られ、しばしば相刻の形をとつていた。^⑤しかし前三世紀、古代ヘブライ人の生活と信仰の記録である旧約聖書が、本来のヘブル語聖書（紀元二世紀）の出現に先立つてギリシア語（七十人訳）に翻譯され、さらに新約聖書が当時地中海東部地域にひろく流布していた通俗的ギリシア語 *Koiné* を用いて編集されたことは、^⑦これら両主義の提携を示すものであり、同時にキリスト教が国民的宗教から世界的宗教に飛躍する契機となつたと言われている。キリスト教の出現は実にそれ以後のヨーロッパの地理的景観をさえ

根本的に変貌させる画期的事件であつた。

しかしそれにもまして、元來はきわめて素朴であつたユダヤ教キリスト教の教儀が、ギリシア主義の伝統を汲みつづけた初代教父たちの手で組織化され、中世人の受容し易い神学体系と化成したことは、中世初期におけるこれら両主義の完全な融合であつたと言わねばならない。もちろん信仰を根幹とするキリスト教儀とギリシアの合理主義とを調和させることは、円を四角にするような企てであり、知性に忠実であらうとするギリシアの諸学者には苦痛を伴ない、自暴自棄的な気持さえ抱かせたのであるが、結果的にはヘレニズムの幹に継木されたヘブライズムがカトリシズムという形態をとつて、中世ヨーロッパの精神界に君臨することとなつた。しかしオリゲン、オーガスチヌスなど初代教父の手により、いかにみごとにキリスト教神学が体系づけられたにせよ、むしろみごとであればあるほど、蒙昧な中世の一般民衆に、それがそのままの形で受容されるはずはなかつた。民衆の俗耳に投じ、かれらを喜ばしめると同時に、考えさせ、悔改めさせ、教会に帰依させるいわばアトラクシヨンのな機構が存在しなければならなかつた。

だしぬけに、いかに高遠な信仰をつきつけても、それが民衆の感動を誘わないことは、わが国におけるキリシタンバテレン布教史がこれを証明している。子供にも分り、しかも哲人も考えめぐらさなければならぬような巧妙な説話をもつて民衆の心を射とめる必要があつた。このような用具として用いられたのが、こゝで考えようとする天地人間の創造物語 *A Story of Creation, Schöpfungsgeschehen* であつたとと思われる。あとで述べるように初代神父の一人バール Basil などが、ほとんど一生を創世記一章の研究と説教 *Sermon* に費したのはその一つの証明である。

創造物語は聖書の最初に記され、語られる頻度 *Frequency* から言つても他の説話を凌駕したのであるが、ことにそれが単なる思想としてでなく、偉大かつデリケートな歴史的事実として語られ、それを聞く民衆もまた大きいドラマの中の一人の *actor* であることを自覚せしめることによつて、その布教的效果、従つて思想造型的效果はいつそう大きかつたと思われる。

さなきだに中世の思想は幽遠無比なキリスト教神学に貫かれて理解し難く、禁制の面が多いのに、わざわざこのよ

うな迷信じみた、一種の *Superbia* に類する非現実的な説話をもち出し、この窓を通して、その一断面を見ようとすることは、すでに否定されようとしている中世の暗黒面をもう一度明るみに出し、ある意味では学問の進歩に逆行することであるかも知れない。しかし思想は所詮計測できない性質のものであり、人間が常に合理的に行動するものでもない。わが国現在の知識人の間でさえ、古代バビロンに発する *astrology* の影響が全然後を絶つたとはいえない。

いわんや、中世においては、ごく小数の高い知性とゆたかな靈的經驗をもち得た人々があつた反面、日々のはげしい勤勞から思考力を喪失し、外から加えられた教説を天与のものとして無条件に受け取る以外、なんらなすなき愚昧な民衆が人間の大部分を占めていたとしても少しも不思議ではない。この小論はかれらの間に創造説がいかなる影響力をもつていたかを考えようとしているが、それに先立つてまずこの物語の成立した事情なり、その内容について一瞥しなければならぬ。

一 旧約聖書創造記の成立と構造

旧約聖書開卷第一頁、創世記一、二章に記されている天地および人類の創造物語（以下旧約のものは創造記と呼ぶ）は、創世記八章の洪水物語とともに、おそらく最も広く人に知られている神話の一つであり、わが国にも天主教の到来とともに十六世紀の終りころ早くもその大要が紹介されている。ことに平田篤胤の神学には大きい影響を与え、彼が造物主にゴットと振り仮名し、諸神を生んだ伊邪那岐、伊邪那美の二神を阿陀牟（アダム）、延波（エヴァ）に擬していることは村岡典嗣氏などの研究で明らかにされている。

創造記の内容は、いまさら改めて述べる必要はないが、主として関根訳^④により、重要な事項だけを摘記すれば次の如くである。第一章は天地万有の創造である。「始めに神（エロヒム）が天地を創造された。地は混沌としていた。暗黒が原始の海の表面にあり、神の靈風が大水の表面に吹きまくっていた。まず神が光あれと言われると光が出来た。神は光を見てよしとされた。神は光と暗黒とを分け、光を昼と呼び、暗黒を夜と呼んだ。夕と朝とがあり、これが第一日であつた。二日には天、三日には地と海と植物、

四日には日と月と星、五日には鳥と魚、六日には地上の動物と人間が創造されたが、創造の最後の作品である人間は神の像 *image, Bide* の通りに入念に創造された。人間にはそれ以前の創造物一切が食糧として与えられ、ふえかつ増して地に満ちよと言つて神は万物を祝福した。六日のうちに創造の業を終えて、七日目に神は休息をとり、この日を祝し、聖めた。」

第二章は人間の創造である。「神（ヤハウェ）は地の塵から人を造り、彼の鼻に生命の息を吹きこんだ。そこで人は生きた者となつた。神は人をエデンの一つの園^⑤に置き、すべての樹を与えた。四つの河がエデンから流れ出し、その一つはユーフラテス河であつた。神は人が独りであるのはよくないとし、彼を眠らせて、その肋骨を取り、これを一人の女に造り上げた。」

創造記は以上のごとくであるが、これに後日物語が付随する。第三章の墮罪がそれである。アダムとエヴァはエデンの園で幸福な状態にあつたが、まずエヴァが、当時獣のなかで最も狡猾な蛇^⑥の誘惑に負け、神から禁じられた木の実を食し、これを夫にも与えた。神がこれを知り、怒つて

彼らをエデンの園から追放した。墮罪の罰として蛇は一生腹ばいになつて歩かねばならず、女には妊娠の苦痛が増し、男は額に汗して一生働かねばならない。元来塵から造られたのだから、君たちはまた塵に帰るのだと神は最後に言つてゐる。

以上わずか数百語から成る短い物語にすぎないが、創造記はハーディの評するように、読者への効果を予想して高度の技巧が加えられ、その叙述はきわめて印象的かつ現実感を伴つてゐる。^⑧前五世紀ごろこの神話が始めて編まれた時、果してだれがこの文学的技巧を正當に鑑賞し得たかは疑問であるが、これを与えられたヘブライ人は、古代ギリシア人がホメロスの作品に対すると同様、おそらく *Heit* をもつて読み、その言外の意味まで汲み取つたのであろう。

しかし注意してこの創造記を読むと、第一章（厳密には二・四前半まで）と二、三章に見られる神の性格にかなり大きい差違のあることに気付く。第一章で天地を創造した莊嚴な神は、二、三章では突如人に話しかけ、日のすずしきころ園の中を散歩する人間的な神となり、ギリシアの神

々の姿を思わせる。そして創造記前後段の神の非連続性、そこに見出される著しい神概念の断層は、創造記が多くの資料から組成されたものであることを暗示している。十九世紀以後の旧約学の発達は創造記が少くとも二つ以上の資料から成り、その前段天地の創造物語は祭司資料（P）、後段人間の創造物語はヤ・ウエ資料（J）に属することを発見した。この短い文章のうちに、PとJが含まれていることは、いまやこの方面の常識となつてゐるが、石橋智信氏、左近義弼氏などはそれ以外なお別の資料がこれに混入してゐるのではないかという疑いを抱いてゐる。^⑨

創造記の資料構成が明らかになるとともに、その内容もまた決してヘブライ独自のものではなく、バビロンをはじめとし、フェニキヤ、エジプトなど近隣地域の創造神話が有力な原資料 *Text* になり、特にバビロンの創造神話とはきわめて密接な関連をもつことが確かめられてゐる。わが国の古事記のものもその一つであるが、天地創造神話はほとんどあらゆる民族がこれをもつてゐる。そしてこれが直ちに、それぞれの民族の支配的生産様式の反映であるとする大森義太郎氏の説^⑩には疑問があるが、少くとも創造神話

は各民族の自意識のあらわれであることはたしかであらう。創造神話は地域により、また神話内容(構成要素)によりさまざまに分類されるが、いわゆる卵生要素を含むものだけでも三品彰英氏により、五十数例が報告^⑤されている。アーレニウスも古代民族の創造神話の例を多数あげてこれらと比較しているが、民族間の地理的距離が近いほど、その神話相互間に類同性の大きいことはクローンの告げる通りである。聖書の創造物語は、アーレニウスがやはり卵生神話の一つであることを指摘^⑥しているインドのマヌ法典のものともかなりの類似を示しながら、一方北欧の創造神話ともはじめに空間(Cinnungsgap)があつたこと、智慧の泉が設けられていた点などで一部分一致を示している。

しかしドライバーが創造記は「バビロン神話のイスラエル版^⑦」と呼ぶように、隣接のバビロンから、おもな資料を得たことはクローンの地理的距離の近いほど関連の蓋然性が大きいとする説を裏書きしている。また創造記の編集された前五世紀のころ、ヘブライ人がバビロンに俘虜として幽囚生活を送つていたことを考え合わせれば、いつそう明瞭に両神話の関連性が推知される。メソポタミアの地方が

前二〇世紀のハムラビ以来、天文学数学が非常に発達^⑧していたことは、次々と発見される楔形文字の碑文によつて明らかであり、特に一八七五年ジョージリスミスがニヴェのアシエルバニル Ashurbanipal 王立の図書館の遺跡から発掘した前七世紀ごろの碑文は創造記の成立に大きい光を投げかけている。しばしば言われるようにバビロン人は「空間を知識的に征服し、宇宙の組織にはじめて秩序をもたらした^⑨」民族として古代の精密科学の上に大きい貢献をしていながら、このバビロンから得た資料であるため、創造記はその素朴さのなかにも、一種整然たる秩序が見出される。分化・進化など近代科学にも共通する觀念があるほか、特にバビロンの暦学の影響が色濃く吸収^⑩されている。すなわち神が六日の間に天地万有を創造し、七日目に休息したという週単元の時の刻み方は当時バビロンで観測されていた七つの遊星に起源するものであるといわれている。

このように創造記の記事はバビロン資料を有力な母体として成立したが、しかし決して単なるその模倣とみなすことはできない。バビロン神話はじめ、他の創造神話が、多くは創造の意義を意識していないのに、創造記にはきわ

めて明瞭な作意と目的とが見出されることはまず考えられる特色である。具体的にいえば創造記には莊嚴な唯一神の思想と安息日の考えが盛られ、他の類同神話に見られないユニークな性格が生まれている。

バビロンの天文学から資料を得たといえ、創造の歴史との関連において一週の日を聖別し、これを安息日とすることはユダヤ教およびその daughter religion (キリスト教) 以外に見出されないことである。エジプトやバビロンにおける苦難に満ちた幽囚の生活から、一週に一日絶対に勤労を停止し、自衛的自己保存の道を講じたのはヘブライ民族が必要に迫られて学び取った民族的叡智であつたと思われるが、それに根拠を与えたものがこの創造記の記事であつた。ローマギリシア世界にはこの安息日制度は奇異なものともみなされ、キリスト教が流通してからも、多くのギリシア都市はこの制度を否定した。そのため一時ローマ皇帝によつて安息日の遵守は禁止されたが、ユダヤ人は依然これを固守し、今日人類の大部分が採用している一週一日休日制の基礎を置いた。

創造記のいま一つの重要な思想である唯一神の問題はこ

こで軽々しく論ずるにはあまりにも大きすぎる。原始民族の間にもきわめて素朴な一神教のあることをゼエデルブロームは語つており、最近では前十四世紀エジプトの Amen-hotep IV (十八王朝) が、唯一神教を宣布した最初の人であるという説も出ている。もちろん唯一神の定義如何によつていかような議論もできるが、ヘブライ人の神が「有りて有るもの」 Elyeh asher Elyeh, I am that I am (出エジプト記三・一四) とよばれる永久の存在者、倫理的で正義を屬性とする神であることは、他民族の唯一神から峻別

さるべき諸性質であると思われる。この唯一神の發生については、茫漠たる沙漠の産物とみなす Renan, Peschel などの地理的環境論が一時流行を見たが、コーヘンはこれについて、沙漠生活はたかだか星辰崇拜を促進するが、唯一神の發生に関係はないと言つてゐる。パレスティナ地方の歴史地理学的研究に精進したジョージ・スミスもまた、パレスティナにかんする地理学者カール・リッターの文章を引用しながら、唯一神教の發生地はアラビアでなく、シリアであつたと述べているが、たしかに唯一神の思想は地理的環境ではなく、むしろヘブライ人の置かれた特殊な社会

環境から生み出されたものであると考えられる。しかしそれは、後年 Weber によつて近代資本主義社会と関連づけられた召命 Beruf の思想、選民 A Chosen People の思想とも密接に結びつく歴史的、倫理的唯一神教であるから詳細は専門家の攻究に委ねねばならない。しかし創世記をはじめ Hexateuch とよばれる旧約聖書最初の六巻が編集されたのは唯一神教 monotheism を奉ずべきはずのヘブライ人が相当厚顔な多神教徒に墮し、淫らな偶像崇拜を行つて恥じなかつたことを戒める意味が多分にあつたと思われ。かれらの偶像崇拜の事実もまた聖書自身がこれを物語つてゐるが、かれらが遊牧民族から農耕民族に転じてから、いつそその弊害は大きかつたようであり、かれらをバールその他の偶像崇拜から唯一神に復帰させることが、ヘブライ予言者召命の一つの理由であつた。

唯一神の思想を盛る創造記がその後、ヘブライ民族の間に、いかなる思想的展開をとげたかは明らかでない。この記事だけを抽出して、キリスト教以前のヘブライ思想史を跡づけるのは困難であるが、中世への関連を考えた場合、創造記の註釈的な意味をもつ重要な思想がこれに附加さ

れ、新約時代にはユニークな神観、宇宙観、人生観が定型化してゐたように思われる。

神が創造した天は、地を半球状に蓋う天幕のごときのものであり、星はその天空にちりばめられ、日と月とはその天空を動いていく。日は新郎のごとく、また勇士のごとく、その一隅(天の涯)から出発し、空の道を通つて、西の空に渡り、翌日またフレッシュユなエネルギーをもつて天空の旅を始める。(詩篇一九)しかし日も月も、人間に必要とあれば、天空の任意の地点で停止することもあり得る。かくてイスラエルの民が敵に打ち勝つまで「日よギベオンの上にとどまれ、月よアヤロンの谷にやすらえ」(ヨシヤ記一〇・二三)という虫のいい願ひとなり、「矢の光り、槍のきらめきに幻惑されて月と日がその住処 *Habitat* に立ちとどまること」(ハバクク書三・一一)もあり得た。全体として、天と地は神の栄光をあらわし、神は土地を足場として立つてゐる。これらの思想は直接中世のコスモロジーにつながるものであるが、天を神の御座とする思想から一転して、これに「天の父」という性格を与えたのは、キリストに始まると言われる。

創造記前半にくらべると、その後半、すなわち人間の創造とエデンにおけるアダム・エヴァの物語は新約時代まで、ヘブライ民族史に及ぼした影響は比較的微弱であつたと考へられるが、神の最終の被造物アダムは、ヘブライ人の遠つ祖であり、かれらは克明にその系図を作り上げている。^⑤

（創生記五——一章）また人間としてのアダムの性質については、ユダヤ教のラビたちによつて、種々の註釈が附加されている。ここにその二、三例をあげると

「天から造られたすべての被造物は、その霊も肉も天に属し、地から造られたすべての被造物は、その霊も肉も地に属している。ただし人間だけは例外で、霊は天から発し、肉は地から出ている。」（ラビシマイの説、二世紀ころ）

また他のラビは、人間の天的な特質と地的な特質を四つずつ数えているが、それによると、「家畜のように飲み、食ひ、繁殖し、死ぬことが人間の地的な性格であり、天使のように直立し、話し、考え、見る（人間の目が家畜のように頭の側面についていないのはこのためである）ことのできるの、人間の天的な性格である。」

ユダヤ教におけるさらに奇怪な人間観は三世紀ごろ、

R. Samuel bar Nahman が、神が最初アダムを創造した時、背中が癒着した両面の人間であつたと言つてゐることである。創生記一・二七に「男女に神はかれらを創造した」

Male and female he created them とあるのはこれであり、神はアダムを androgynous（男女両性具有、雌雄一体）に

創造つた、しかしのちにこれを背中を切断し、男と女を造つたのであると。同様の考えが、プラトンの「饗宴」

（一六）のなかに記され、アリストパネスの「リュシストラテ」（二一五行）にも見出されるから、これは近隣諸国の Love の断片が創造記に混入したのではないかとも言われているが、これに劣らず興味があるのは、アダムの眠つてゐる間にその肋骨の一本を抜いてエヴァを造つたとする二・二一^⑥の記事である。もしこれが事実とすれば、男の肋骨は女より一本少ないはずである。これも相当なかく伝説的に信奉されていた人体構造説である。

創造記の中世的解釈の前奏曲と見られるこれらのあやしげなる話が横行しつゝあつたころ、さすが使徒パウロはもつと深い意味で人間の本質を洞察している。すでに詩篇の

記者も神によつて造られ、母の胎のうちに百体の一つもなかつた時から、神に記憶され（詩一三九・一七）、海の底、地の涯に逃れても神から遊離し得ない人間の運命を歌つたが、パウロはさらにすすんで、神に創造られ、天を指向し、善をなそうとしながら、なお塵から創造られ地に属するゆえに、心ならずも罪を犯す^⑤アダムの子、二元的動物人間の悲哀を至る所でないといっている。土から創造られた肢体には、神から出たのではない他の律法 Gesetz, Law が支配しており、神への復帰をさまたげる。神を知るといふ内なる人 inner self の外皮は、地に属し、悪を行なつて恥じない外なる人によつて包まれている。これは他の一切の生物と同じように造られたるもの人間の生まれながらもつ悩みである。かれの深い懊惱、うめきはロマ書に最も強く表出されているが、罪深き第一の人アダムも ἥμαρτος ἁδამου ἁδάμ, ἁδάμの罪をあがなうべき第二のアダム εὐχαριστος ἁδάμ, キリストの出現によつて、かれは始めて救を見出し得た。

人間の外圍である具象的な自然、人間そのものについて、は以上のように、創造記の内容がユダヤ人の間において、

かなり拡充され、ゆたかなものとなつてゐる。ゲーテの Faust の構想の原型となつてゐるヨブ記には、天文学的觀察の凡でなかつた片鱗^⑥があらわれ、詩篇は至る所神によつて創造された天然の美と人間の本質を歌い出している。しかし、中世に大きな問題となつたエデンの園の所在、四つの河の現在地名との identification のごとき閑問題については口を緘し、ほとんどなにも語られていない。ギリシア世界において、かれらはいわゆる Diaspora として、地中海の周辺地域ならびにメソポタミアに相当多数移住し^⑦、決して現実の地理的知見に乏しかつたとは考えられないが、聖書その他の文献にも、エデンや四河を深く問題として取り上げた形跡はない。かれらにはもつと切実な人間の運命、かれら自身の運命の問題があり、エジプト人のように死後のことなどもほとんど考える余裕がなかつたようである。それよりも、現在のユダヤ人にもその伝統が継承されている現実の利害の方がもつと大きい問題であり、ユダヤ教がしばしば「この世的宗教」、「現生宗教」this world religion と呼ばれる理由もここにあつた。

しかし、その教師、いわゆる Rabbi の中には前述のよ

うに閑にまかせて奇怪な説をなす者もあつたが、教師も一般ユダヤ人もひとしくきわめて神経質であつたのは、創造記によつて理論づけられた安息日遵守の問題であつた。教師たちが重箱の隅をほじくるように瑣末で煩わしい安息日遵守規則百数十則を作り出し、自らをしはる。ただでなく、これを民衆に強いていたことは、新約聖書におけるキリストと教師との間の幾度かの安息日論争 (マルコ伝二・六、一三章) がこれを示している。結局、「安息日は人間のために造られ、人間が安息日のために造られたのではない」 (マルコ伝二・二七) というキリストの鮮やかな論断がこの問題に終止符を打つた。

中世以前において、創造記がユダヤ人以外の諸民族の思想史にどのような影響を与えたかは詳細に追究し得ないが、知らざる神 unknown God, Ignolo Deo (使徒行伝一七・二三) を拝跪していた地中海周辺の諸民族に、大きい意志である創造の神が、使徒たちにより述べ伝えられた時、いかにはげしい動揺と混乱とを惹起したかは使徒行伝の記事などで一端が察せられる。しかし中世になると俄然局面が変わり、天地創造説がさまざまに粉飾され、よい意味にお

いても、悪い意味においても、その思想の一隅に明瞭な布石となつてあらわれる。以下その事情を考えていくことにする。

二 創造記の中世的展開

原始キリスト教徒の間では、単に信徒の寄合ひ、集会 *ekklesia* にすぎなかつた教会が、初代教徒の夢想だもしなかつた方向に拡大し、中世における公然たる地上王国ローマ教会に発展した過程については、ここで改めて述べるまでもない。ただ言い得ることは多分にギリシア哲学の影響を受けたオーガスチヌスを始め、Clement of Alexandria, Minucius Felix, Lactantius, Ambrose, Jerome など初代教父たちが本来のキリスト教教儀にギリシア思想を織りこみ、これを彫琢してみごとな神学体系を造り上げたことである。A・D・五〇年ごろ使徒パウロは、アテナイのアレオパゴスの丘上で、アテナイ人に布教する時、「汝らの詩人のうちの或る者」(使徒行伝一七・二八) と言つてギリシア文化の伝統を尊重したが、初代教父たちはいずれも、異教徒に示した思いやりの深いこのパウロの方式を範としたわけて

ある。

それゆえ、カトリシズムは前述のように、ヘブライの宗教とギリシアの哲学との融合の形をとるが、これがどのようにして中世ヨーロッパの一般民衆の胸裡に浸潤していったかを探求することは一つの興味ある課題である。キリスト教儀の規範である聖書は、五世紀の始めごろすでに Jerome によりラテン訳 (Vulgate) が完成されていたが、印刷技術などを考え合わずならば、それがどの程度当時のヨーロッパに普及したかは疑問である。

またローマ教会が成立しても専門の僧侶が多数出現したのは十世紀ごろ、ドミニカン派およびフランシスカン派の修道院において集団的に養成された後であるといわれ、口頭による布教も多きを望み得なかつたのではないかと思われる。大部分信徒相互間の口伝によつて、キリスト教儀が民衆の間に滲透していつたが、かれらの熱心と、信仰を容し易い状態にある一般民衆の被支配的意識が案外速かにカトリシズムを全ヨーロッパに弥漫せしめるに至つたのではないかと思われる。知識面においては、小数の支配者階級と最大多数の民衆との間には、相当深い溝が横たわつ

ていたはずであるが、それにもかかわらずカトリシズムはむしろ下から盛り上がる力としてヨーロッパの思想領域を克服していつたのではないであらうか。

その際、三位一体、受肉 Incarnation 受難 Passion 等重要な教儀にまじつて、天と地、人間と生物の創造物語がいかなる位置を占めたかを考えようとするのであるが、一つの framework をなしている教儀の中から、これだけを抽出しようとすることは実際は無理である。しかし中世の僧侶たちの記録や、さらに稀有ではあるが一般民衆の声なき声がたまたま記録として残っている文書を見れば、深遠な他の教儀よりも、創造物語により大きい関心が払われていたのではないかを推知せしめるものがある。まずこれが、前述のように聖書全巻の最初に記されていることが他の説話にまさつて、重要な意味を感じさせる一つの理由であつたし、さらに天地の創造という荘嚴な、しかもかれらが日常見聞している可視的な自然界の成立の謎を解明してくれる教説につづいて、男も女も富者も貧者もその経験から思い当ることの多い人間の創造、人間の墮罪というデリケートな物語が用意されていたために、一も二もなく、キ

リスト教という未知な教に共鳴するに至つたのであらう。

四、五世紀ごろ、創造記にかんする説教が方々で試みられたことは、初代教父たちの著作によつても知り得られるが、このうち中世人に対して最も大きな影響を与えたのは、カイザリアの監督 *Basil* の *Hexameron* とよばれる創世記一章の通俗的説教集であつた。彼は一生を捧げて天地創造の解説にあたり、科学的好奇心を満足させ、天地の構造に対して民衆の目を開かせたが、またさまざまの奇怪な説を附加して、中世の知的ジャングルを作り上げたことは、現在の立場からすれば功罪相半する。たとえ彼は潮汐現象のみでなく気象まで月の運動で説明した^⑧。元来宗教の要素には威敬の情と共に、多分に好奇心、ロマンチックな憧憬が混入しているが、古代末から中世にかけてのキリスト教の拡大 *expansion* にも大きくロマンチズムが作用しており、創造説などはその雰囲気をかもし出す最も大きい役割を果した要素の一つであつたと思われる。

次にいまま少し具体的に創造記が、キリスト教の拡大について、当時の人心にいかなる影響を及ぼし、どのような宇宙観、地理的世界像、人間観を抱かしたかを述べてみた

ら。

まず創造記によつて啓培された中世人の宇宙観 *cosmologic* の問題であるが、一言にしていえば、*Aristotelian-Proleptic-Biblical cosmology*^⑨ であつて、決して創造記そのままの思想ではなから。創造記はなるほどエホヒムによつて天地が創造されたことを記し、その起因を説明するが、それ以上はなにも語つていない。聖書の他の箇所にも、一部分前述した断片的な天体の位置、運動にかんする記述はあるが、なおそれだけでは、かれらの目撃している天界の全消息を物語るものではない。ここにおいてアリストテレスの *Metaphis* や *プラトニイオス* の *Almagest* における地球中心説 *die geozentrische Lehre* が採用されざるを得なかつたのである。

中世末期に、ガリレオの地動説が公にされると、「彼(アリストテレス)は神にならう *imitate* といひながら、実際は神に背いて *contrary* いるのである。彼は神と天使たちを離間させ、天を冒瀆するものである^⑩」と教会側から、最後のあがきにも似た恨みの一矢がアリストテレスに加えられているが、実際はアリストテレスおよびその理論を修正し

たプロレマイオス一派の地球中心説がキリスト教宇宙觀の一枚看板として、中世をまかり通つたのである。聖書は遊星の系統には全然ふれていない。そこでトマス・アキナスなども、アリストテレスの著作と聖書とを入念に比較し、その異同を辯じ、宇宙觀にかんしては潔よくアリストテレスに頭をさげている。

中世的宇宙觀に關係があるのは、ローマ教会が公認した天地創造の年代である。その初見は明らかでないが、七世紀の終りごろ書かれた Bishop Bossuet の Discourse on Universal History を見ると次の如く、前四〇〇四年となつてゐる。その前後を少し抜書すれば

「キリスト教徒の物語るところによると、始めに、翼をもつた楽師や使者にかしずかれた賢く、善良な天上の王 celestial King があつた。王は永遠の昔から存在し、かねがね適当な時期に、自分より数等劣るが、かれ自身の不完全な写し imperfect copies である一時的ないきものを創つてみようと思ひ定めていた。紀元前四〇〇四年という年に、人間を頭とする生物の創造を開始した。このドラマの開幕と閉幕には二つのすばらしい事件が置かれ

てゐる。まず、神の言葉に従つて、日・月・星、すべての植物と動物とをもつ地とが、それぞれ適当な場所に配置され、自然は全くその法則どおりに活動を開始した。最初の間は、神の特別のはからいで、泥から造られ、それから彼をぐつすり眠らせて置いてその肋骨の一つから、最初の女を造つた。彼らは一つの果樹園に住まわれ、夕方すずしくなつてから園の中を散歩する園の所有者、主なる神をしばしば見かけることができた。……」

以下エデンにおける墮罪、樂園追放、ノアの洪水などが述べられ、最後にオーガスチヌスの神の都と悪魔の都の説を引いて、人間の歴史は結局これら両都市の抗争にすぎないと結論してゐるが、このうち注目に値するのは創造の年代である。これは前述のように、創世記に克明にアダムの子孫の系図が記され、一々その没年を記してゐるのを逆算してこの数字が得られたものであるが、これのみでなく聖書に記された言葉はことごとく真実だと信じたのは中世人全般について言える一つの態度であつた。しかも奇怪なのは、この前四〇〇四年という数字が多少修正⑥されながら十九世紀までヨーロッパ諸国民の間で、ほとんどそのまま信

じられていたことで、人間の精神の發達のまだるさをまざまざと見せつけられる一例である。

中世社会の上層部として自他共に許した監督 Bossuet の説を一部引用したので、これと対蹠的な名も無き民の宇宙觀（十世紀ごろ）^⑥を書き止めて置こう。これを見ても、創造記の記事がいかに深く、常民の心底深く叩きこまれていたかがうかがわれる。

「二日目に神さまは天をお造りになつた。それは大空 Firmament とよばれ、結構目で見える実在のもののだが、あまりにも高い所にあり厚い雲がかかつているためと、われわれの目が弱いためとで、見ることはできない。天は全世界をそのふところに包んでいて、深く高く、どんな風車より早い勢でわれわれの周囲をぐるぐる回っている。それはまんまるで、欠けた所なく、星でちりばめられている。神様の言いつけて、日は天と地との間をゆききしている。昼は地の上に、夜は地の下に來る。日はいつも地のまわりを駈けている。それで夜は地の下で輝き、昼はわれわれの頭上を照らすのだ。日はたゞいそう大きいものだ。ある本に書いてあつたが、地のさ

しわたしのように大きいということだ。しかしわれわれの見る所から、たいそう遠方にあるので、ちつぽく見えるのだ。どんなものだつて遠ければ、小さく見えるものだ。月も星もみんな大きいお日さまから光を頂戴している。お日さまは義の太陽、われらの救主キリスト様を取つたものだ。そしてわれら信者は、小さい星として、神さまの召に与かれる。」

少數の例外をのぞき、中世の大部分の期間にわたつて、ヨーロッパを風靡したと思われるこのアリストテレス——プロレマイオス——聖書のコスモロジーが、アリストテレス——プロレマイオス——コペルニクスの宇宙觀に置き交えられる時に、中世から近世へのまさにコペルニクスの展開が目撃されるが、天国と地獄との間に煉獄という漸移地帯を想定したダンテの宇宙觀はまた、中世から近世へのコスモロジーの橋渡しの役割を演じたものであろう。

次に創造記の記事がやはり大きい規定力をもつた十二世紀ごろまでの、中世における地理的世界像を一瞥しよう。

まず想起されるのは六世紀の半頃（五四七年）に公にされた

僧 Cosmas Indicopleustes の *Christiania Topographia* ^⑦ の影

響力である。かれは聖書の各巻に部分的に記載されている地理的叙述を綜合してこの書を編んだ。これによると、「地球形説などはもつてのほかの野蛮な考えであり、氣の迷いの産物である。バベルの塔を建てようとした人間の迷ひ、Geistigen Verwirrung がカルデアからエジプトに向い、そこで高慢なギリシアの哲学者の説を取り入れたのである。天地の成立を研究しようとするならば、それは（モーゼが神に示された）ユダヤの幕屋 Tabernacle, Stiftütte のごときものであることを記憶しなければならない。大空が幕屋のごとく地の四隅を被い、その上部には天上の水があり、天使がそこから雨を降らせる。」^⑤これは六世紀から十二世紀ごろまで、社会の全階層に歡迎され、支持を受けた世界像である。彼の意図はその書名が示すように、ローマ教会の教理に迎合し、地球形説を否定するのがおもな目的であり、そのため少し考えただけですぐ看破できる自己撞着 Diemna がその中にあつても当時だれもこれに容喙しなかつたのである。

この狡猾な彼が創造記の記事を見逃すはずはない。ことに従来そんなに問題にされなかつたエデンの園の所在をこ

の書物に記したことが、中世の地理的世界像に拾取のつかないほどの混乱をまき起す一因となつた。かれはエデンの園について次の如く記している。^⑥

「人々は交易のためにシナに行きたがつているが、それはとうていできない相談である。中途に樂園（エデンの園）があるから、それを通り越して、さきに行こうということは及びもつかないことである。しかしシナは人間の居住地の東の端に位し、ここからペルシヤ湾を通り、ローマ帝国に繩を引つ張ると、世界はちようど半分になち切られる。東はシナ、西はカディス、これが世界の東西両端であり、ここを越えて航海はできない。この両方を連ねる長さにくらべては、北風のかなたに住んでいるハイデルボレンの園と、南の方エティオピアの南端を結んだ距離はよほど短く、世界は東西の長さが南北の幅の約二倍に当る矩形形状をなし、聖書の記している所とよく符合する。」

ユスマスによつて投げかけられたエデンはどこかという問題は、中世だけでなく、近世までひきつづき議論の種となつている。中世の地図がいずれも、その東端にエデンの

園を置き、アダム・エヴァの姿を描いているのもエスマスの説に負う所が多く、彼の地理的思想が中世初期のキリスト教地図の源泉となつてゐる。創造記においてエデンの所在を暗示するただ一つの鍵は東の方という方向規定だけである。しかし今一つユーフラテスの源流にあたること、その次につづく四つの河の記載^②から知り得られる。この四つの河の記述は、エデンの所在地を示すヒントの如く見えて、実際はかえつてその謎を深める障害物として作用した。ことにその一つをナイル河に比定すれば、エデンの園はユーフラテス河の源流付近(アッシリア)にあり、同時にナイル河の源流付近(エチオピア)にあらねばならぬといふ自己撞着に陥る。創世記の四つの河の河というヘブル語が単に水路とも解し得ることから、あるいはメソポタミアのテグリス、ユーフラテス両河間の灌漑運河をさすものとし、あるいはアラビアなどに見られる間歇流(ワディ)ではないかなど中世以来、比較的新しい時代に至るまでまだその議論はつづいてゐる。

エデンの所在地問題は、一時わが国でも問題になつた高天原と同じく、現実の地理的位置を云々すべき問題でない

にかかわらず中世人が真面目にこれを問題にしたことはわれわれの理解に苦しむところであるが、地理学者センブルは、「日のずしきころ園の中を歩み給うエホバ神」という創造記の記載から、地中海周辺地域の夏のはげしい日射を避けるため設けられた庭園を連想し、これらの情景を頭に描きながら創造記の記者がエデンの物語を叙述したのではないかといふ穩当な意見を出している。創造記二・六に「地下水が地の下からわきあがつて、土地の全面を潤していた」(関根訳)という文字があるから、エデンの園は一種のオアシスを描いたのではなかつたかとも想像される。従来^③の日本訳、英語欽定訳にはこの箇所が霧、mistと訳されていたが、関根訳では地下水、Vulgateでは洪水 Floodと訳していることから、その位置はとにかく、創造記記者が敘述しようとしたエデンの園の地理的性格はこれでよほど明瞭になる。

聖書の記事に忠実であらうとしたオーガスタヌスもさすがこの四つの河の問題には思ひあぐんで、これは現実の河ではなく、人間の四つの美德であると逃げてゐるのは賢明であつた。

最後に創造記における人間の問題が残されている。神の最終の被造物であり、かれのイメージに似せて創造されながら、その肉体は脆弱なる土塊から成つてゐる。人間は土

の器である。いかに富み榮え、いかに大きい知識を得ても、結局は地の塵に復帰せねばならない。あくまで造られた者、被造物 *creature* である。かれにたかぶりは許されない。いくぶん東洋的虚無、無常觀の響きをもつこの被造者意識こそ、くり返し聞かされた人間創造の物語を通じて、中世人が感得した人間觀の基調であつたに相違ない。造物主の前に謙遜であらねばならなかつたこの被造者意識は、支配者の民衆説得の用具としてまことに好都合であつた。

パウロも言つてゐるが、被造者は創造者に向つて、なぜ自分をこんなに造つたかと言ひ逆うことはできない（ロマ書九・二〇）。同様に被支配者は支配者に向つて、なぜ自分をこんなに苛酷に取り扱うと言へる筋合ではない。貧しい者は貧しいまま、愚かな者は愚かしきまま、黙々と現状に甘んじ、その課せられた勤勞にはげまねばならない。そのよ

うな身分に神が創造られたのであるから。被造者意識は個人個人の精神の問題であるとともに、社会的にはこんな役

割を果し、生れながらの社会階層の差違の弁明に利用されたことと思われる。

しかしこうした被造的人間觀の一方的適用に、民衆は表面は忍従を装いながら、反面支配者に対して無抵抗的抵抗を忘れなかつたと思われる。おごりたかぶる領主・莊園主・僧侶もやがては、自分たちと同様土に歸つてしまふであろう。ひとしく塵に歸るといふ点では支配者・被支配者、貧富賢愚の違いはない。その人間の運命を知つてか、知らずにか、かれらが思い傲り、得意然としてゐるのは、むしろあわれむべきではないか。地にありてはやどれる者 *stranger, hospites et advenas in terra*（ペル書一一・一三）と使徒も言つてゐるのに、この世にぬくぬくと根を張り、枝をひろげてゐるかれらこそ、神に背いてゐる人種ではないか。民衆はかれらに教えこまれた人間觀を逆用して、支配者への無言のつぶてとしてこれを行使し、そうしてかれらにはじめて心の平和がのぞんだことであろう。

このように創造記の人間觀は單にキリスト教布教の用具であるばかりでなく、人間を反省させ、謙遜にし、かつ社会階層相互間の摩擦の表面化を防止するような作用さえ果

し得たのではないであろうか。

しかしもちろん支配者、特に僧侶階級がすべてその法権を笠にきてほしいままの生活をしていたわけではない。被造者意識に最も徹していた者も、また教父・僧侶の間に見出される。その「告白」の冒頭で創造の極微である人間の位置を深く認識し、「造物者のふところに憩うまで真の休息はない」との人間の声を代言する謙虚な呼びかけ *invo-cation* で神に迫つたオーガスチヌスなどは明らかにその一人であつたらう。その他スコラ哲学者の著作の中から、創造と被造者についての記述を摘出すれば、ほとんど際限がないほどであるが、スコラ学の父とよばれる聖アンセルムスにおいては、ここにいわゆる被造者意識は最も濃厚である。神は人間のうちに彼の像を創造した。人間の精神そのものが神の像であるが、人間は不徳によつて神の像を磨滅させる。人間が自分の造られた目的を見失つた時ほどその運命がみじめになる時はない。堪えがたいほど苛酷なアダムの墮罪、アダムの子供、不幸なエヴァの子供として生れた人間は自らのうちに刻印されたあわれな運命を限りなく慟哭しなければならぬ。しかし被造者は、永遠に先立ち、

永遠を超えて存在する創造主をなんら批判し、あげつらう権利はない。アンセルムスはこのように書き記しているが、かれの思想の根底にある *creature* の意識は、当時の修道院といわず、都市といわず、村にも野にも、満ち満ちていた一つの流れであつた。それは封建制の機構ともよく調和し得た思想の流れであり、その一部には反抗的激情の萌芽を秘めながら、全体として中世の精神を「つつましい」ものであつたと評価し得る一つの心的背景をなしていた。

そしてこの流れは中世を超えて一部分近代にまで継承されている。一々その著作から引用しなくとも、デカルト(被造物の整序)^⑤、スピノーザ(内存的原因 *causa immanens*)^⑥、パスカル(考える葦 *in roseau pensant*)^⑦、カント(道徳的被造者)^⑧、ケルケゴール(有限者)などは被造者意識の連鎖の一環をなす思想によつて裏付けられていた。

しかしルネサンスはある意味で被造者意識がヨーロッパから衰退する時期であつた。それは人間の発見であつたけれども、土から造られたアダムの人間ではなく、考える人アントローボス、こざかしき人ホモサピエンス *Homo sapiens*^⑨ としての自己発見であつた。いわばルネサンスは

アダムからアントローボス、さらにはホモサピエンスへの飛躍の時期であつた。そして同時にながく提携を保つたヘブライ主義、ギリシア主義が訣別して、それぞれ別の方向へと発足した時期ともいえるであろう。

一方これと前後してマニファクチュア生産様式が普遍化していき、この面からも創造記の人間像は崩壊の一途をたどる。十六世紀から徐々に擡頭しつつあつた機械論的世界観は、中世人の堅き城であつた地球と人間中心の天動説をみじんに粉碎し、創造記の宇宙観も一片の泡沫となつた。

もちろん創造神を中心とするキリスト教儀への最後の打撃としては十九世紀中葉の進化論をまたなければならなかつたが、とにかくルネサンスを転機として、中世というエデンを後にし、近代という砂漠にさまよいつづけているのが、自ら脱皮し神に造られた者でなく、神を造り出した人間であると自覚している第三のアダムホモモデルニスの偽りなき姿ではないであろうか。

むすび

以上、旧約聖書創造記に記された創造神への信仰と、あ

るいは創造神が人間への胸裡に投影された時に生ずる被造者意識が、中世思想史の一隅でどんな位置を占め、どのような心理的な働きをし、延いては中世社会史にも一種の潤滑油の役割を演じた事情を跡づけんと試みたのであるが、資料の限定もあり、ほとんど何一つ新しい事実を見出すことができなかった。しかも伏線であるはずの創造記そのものの解明と思想史の上からは、むしろ周辺に位する世界像人間像の把握に重点が置かれ、問題の核心にふれることは比較的少なかつた。しかし人々により浸透の度合は深遠さまであり、具体的な地上生活に顕現することは少なかつたとはいへ、あたかも地下水のように、中世人の思想の底をくぐつていた一つの流れ、被造者意識があつたことに注意を喚起すればこの小論の目的は果された、と考えられる。

なお、オーガスチヌスおよび地理学史についてそれぞれ示教して頂いた服部英次郎・織田武雄両教授に謝意を表して置きたい。

① 中世の定位 *Orientation* の問題はこの小論では重要でない。民

族大移動からルネサンスまでとする常識的区分で十分である。しかし取り扱われている内容は十二世紀ごろまでである。なお世界史を主題地域から三区分したホウランド博士の区分もわれわれには興味深い。博士は古代史は地中海周辺地域を舞台として進行した歴史、中世史は中・西欧の、近代史は全世界の事件に関与する歴史であるとしている。ただし中世史の舞台から地中海地域を除外する考えは採れなす。(A. C. Howland: *The Institutional Pattern of the Middle Ages*.—in *Studies in Civilization*. Univ. of Pennsylvania Press, 1941, p. 69)

② 原随園博士も「信仰融合の運動 (Syncretisms) がヘレニズム時代の一つの特色である」ことを早くから指摘しておられる。(原随園「新義西洋史」一二八頁)。また多分創造記から思い付かれたのではないかと思われる坂口博士世界史三日説にも中世は「ローマ風ゲルマン風生活の融化」の時代と定義されている。(坂口昂「概観世界史潮」七頁)

③ George Sartou: *Introduction to the History of Science*, Vol. 1, p. 16 以下たびたびこの書物を引用するので、単にSとさう略字を用いる。

④ 歴史家以外では Matthew Arnold: *Culture and Anarchy*, 1869.

(多田英次訳「教養と無秩序」) が、その第四章をヘブライ主義とギリシア主義の比較に用いている。アーノルドによればギリシア主義の最高の観念は事物を如実に見ることに、またその支配的観念は意識の自発性であるが、ヘブライ主義では、これらがそれぞれ行為と服従、良心の峻厳となる。なお石田憲治「基督教文学観」

にもこれと類似の説がある。

⑤ 井上一「ユダヤス・マツカバイオスの乱」史学雑誌五九の一〇
井上氏はこの乱をもつてヘレニズムに対するヘブライズムの反撃と見ている。

⑥ 前三世紀ごろアレキサンドリアには多数のユダヤ人が居住したが、かれらは母語の代りにギリシア方言を用いた。かれらのためにギリシア語聖書が必要となり、前二八五—二四七年にかけ、主として Alexandrian Jew より成る七二人(あるひは七〇人ともいう)の委員が完成したが、七十人訳(略字 of, the LXX)である。最初は旧約聖書最初の五巻 Pentateuch だけであつたが、前一二三年には全巻完了、Septuagint とよぶヘブル語聖書の刊行(一二世紀)より二百年以上早い。(S. I. p. 151)

⑦ ジョージ・ミリガン著、神田盾夫訳「新約聖書文献考」五七頁
コイネーは日常ギリシア語、墮落した、あるいは下等なギリシア語とも呼ばれる。古典(アテイツク)ギリシア語と近代ギリシア語との中間に位する。

⑧ 使徒パウロは「ユダヤ人は微 wisdom を請い、ギリシア人は智慧 wisdom を求む」(コリント前書一・二三)と云つて、はつきりギリシア人の合理主義を認めている。

⑨ Origen はギリシア哲学の基礎の上にキリスト教神学を樹立しようとした最初の人である。主としてアレキサンドリア、パレスティナのカイザリアで活躍したが、二四八年に公にされた異教徒ケルソス Celsus に宛てたキリスト教の弁明八巻が代表的著作である。彼はまた Hexapla とよばれる初期の polygot Bible を編

275 no. (S. I. p. 315)

⑩ 日本における初期の伝道はドナリナ・キリシタン (l'Abbé de la doctrine chrétienne) がおもに用いられた。これは天地万像を造りあらせ玉うた御あるじ、デウスを分別することが第一肝要の題目となりて居る。(Leon Pagés, Histoire de le Religion Chrétienne au Japon depuis 1598 jusqu'a 1651, 吉田訳二六頁)

⑪ 英語では Genesis, ゲルマン語系の聖書ではモーゼ第一書(たとえばスエーデン訳 Första Mosebok) と記して居る場合が多く、モーゼの作という伝説があつたからである。しかしハブル語聖書ではこの題名はなく、一・一の言葉を取つて単に「はじめ」と命名されている。五〇章から成つて居る。

⑫ ノアの洪水物語、やはり古代社会に流布し、バビロニア洪水物語に資料を得ている。洪水伝説は近世にまで信ぜられ、十八世紀にはスイス産のサンショウウオの化石がノアの洪水で溺死した人間の化石であると考えられ、「洪水に滅ぼされた憐れな人」(Homo cristis diluvii testis) という意味の学名が与えられた。また比較解剖学の祖とされる George Cuvier (1769—1832) は、パリ盆地に累積する種々の地層中の哺乳動物の化石が、層ごとに異なることに気付き、地表にしばしば大洪水があつたと結論した。地質学者 Suess ヴェー、この洪水を信じ、火山爆発に起因する津波によつて惹起されたものでこの津波がペルシア湾からメソポタミアの低地に侵入したものと考へた。(アーレニウス後掲書二四頁) なお現在 pleistocene とよばれる地質時代の旧名 diluvium 洪積世もこの洪水伝説から名付けられた。(D. Stamp: An Intermediate

Geography, V. p. 7)

⑬ 村岡典嗣「平田篤胤の神学における耶蘇教の影響」(日本思想史研究)所載、二九七頁)、なお魚木忠一「日本基督教の精神的伝統」一一九頁以下。

⑭ 創世記の邦訳は日本基督教協会の文語訳、口語訳のほか、左近義嗣訳・塚本虎二等聖書知識社同人の訳訳があり、関根正雄訳(岩波文庫版)は最も新しく、最も信頼できる。

⑮ 通常エデンの園といわれるが、エデンと園とは別である。エデンという地域のなかの一つの庭園である。園は Valgate では Paradise と訳されしる。パラダイスは元来ペルシア語である。

エデンの物語はルネサンス以後の美術・文学の題材になつて居るが、十七世紀の Milton の Paradise Lost (1663) には中世的な伝承を多分に保存している。(藤井武訳「楽園喪失」訳者序) なおエデンについで、A. Toybee は歴史家らしい解釈をしている。

⑯ 巖山政道・阿倍行蔵訳「歴史の研究」一巻一二三頁)
⑰ キリシアのディアシア祭にも蛇が聖蛇として取扱われている。
⑱ (ギルバート・マレイ著藤田健治訳「希臘宗教発展の五段階」三九頁)

⑲ F. E. Hardy: The Early Life of Thomas Hardy, p. 292 f.

⑳ W. Staerk: Die Entstehung des Alten Testaments, S. 18. 4 (Die priestertliche Schrift) の成立は I (Der Jahvist) より約百年ほどおそい。石橋智信氏によれば、J は前八五〇年ごろである。ただし P のうち、創造記のものは ein Produkt der von den babylonischen Juden getriebenen Schriftstellerei. (Staerk.

5. 22)

- ⑮ 石橋氏が「以前の資料」と呼んでいるのは、創世紀三・三二不
老不死の樹の実の項で前後との連絡がついていないためである。
なお六一―三、神が二人の娘と雑婚する記事も]である。(石橋
智信「メシア思想を中心としたイスラエル宗教文化史」七頁)
左近氏によれば二・一〇―一五の四河の記事は思想上前後の連絡
が切れている。また前八世紀までアツシリアが顯著でなかつたか
ら、この部分は了ではない(左近義弼訳創世記一一頁)
- ⑯ 大森義太郎「史的唯物論」八四頁「ある民族においては神は石
工が家を作ることくに天地を築いたと思い、他の民族においては
織師が布を織ることくに神は天地を織り出した」というが果して
そうであるるか、同氏によれば天地創造説はアニミズムの一種で
あり、ヘーゲルの自然哲学は天地創造説の哲学的粉飾である。
(同書九〇頁)
- ⑰ 三品彰英「神話と文化境域」一六頁以下。
- ⑱ Stante Arhenius: *Das Werden der Weltan*. 寺田寅彦訳「史的
に見たる科学的宇宙観の変遷」三一頁以下。
- ⑳ クローン著関敬吾訳「民俗学方法論」七四頁以下。
- ㉑ 「かの尊き者はその卵の中に満一年間住したる後、自ら己れの
静慮によりてその卵を二分せり」(田辺訳)をさしている。アー
レニウスの寺田訳では六一頁。
- ㉒ 「この宇宙は認識し難く、特徴なく理性もて理解し難く、識別
し難く、あたかも深き眠りに陥れる如く闇黒(タマス)の状態に
ありき」(一・一〇)「而して彼は、その両半より、天と地を、
その中間、空間と八方処と、また水の永遠の依処(ヨツナ)とを造れ
り」(田辺纂子訳「マヌの法典」の岩波文庫版一、二頁)などが
おもな類同点。宇宙が混沌から発生するという考え、夜から昼が
生れ出る考えは、多くの創造説にある。前者は混合された液体の
状態から、結晶や団体が分離するさまを見て思いついたのではな
いかといわれる。(フライエンフェルス著、安河内泰訳「宗教の
心理」二一〇頁)
- ㉓ アーレニウス前掲書六六頁、創造記の智恵の木にあたるもの
が、北欧神話では智恵の泉、ミーメス・ブルン (Mimes Brun)
となつてゐる。
- ㉔ Driver: *Genesis* (Westminster Commentary) p. 30.
- ㉕ Babylon Exile ネブカトネザル王により、ヘブライ人が俘虜と
して、メソポタミアに連れ去られた。大体の年代は前五八七―五
三八、その間をバビロン時代と呼ぶ。なおルターにはバビロン捕
囚について有名な論文 *De captivitate Babylonica* がある。
- ㉖ 学問的な発達は前六世紀以後であるが、前二千年のスメル時代
から金星の運動が注意され、一週七日制、一日二十四時間制が始め
られ、数学にかんしては加算符号十、長さをあらわす一 (length)
の符号が用いられていた。しかし初期の天文学は *astrology* とし
て発達したのである。(Otto Nengebauer: *The Metonic Cycle in
Babylonian Astronomy*. *Ibid*: *Exact Science in Antiquity*. 244 ff.)
- ㉗ George Smith: *Chaldean Account of Genesis*. p. 57 ff. なお定金
右源二「古代東方史の再建」にはスミスの発掘業績が記されてい
る。(同書三八二頁以下)

③① Earnst Cassirer : An Essay on Man, An Introduction to a Philosophy of Human Culture, Yale Univ. Press, 1947, p. 48.

③② 創造記では分類操作が目立つてゐる。光と暗黒、大空の上の水と下の水、地と海とに分けたように、植物は二種(草と樹)水中動物は二種(巨大な魚と魚)地上動物は三種(家畜と地の獣と地に這うもの)に分け、聖者学者(Gunkel)がさうように、最古の生物分類としては悪くない。(矢内原忠雄「創世記講義」)

③③ 創造記における生物創造の順次は大体において進化論の方向に一致し、下等動物から高等動物に至つてゐるが、プラトンの「テイマイウス」の中に見られる創造は最高をもつて始まり、漸次下級の事物に及んでいる。プラトンによれば神は「生産する父」(Ὁ γενεῖταις πατήρ)であり、また芸術家であり、建築家である。(ゼンデルブローム後掲書三四七頁)

③④ 創造伝説の原形は

第一日	光	第五日	天体
第二日	天	第六日	鳥
第三日	海	第七日	魚
第四日	地	第八日	地上動物

であつたが、安息日の制度を根拠づけようとするPの意図によつて創造を六日間に割り当てたといわれる。創造日数と創造作業とが一致している原形の均整美、リズムの美はこれで失われた。

(民秋重太郎「宗教の理解」三〇頁)

③⑤ 予言者エゼキエルは安息日遵守がヘブライ人と異邦人とを區別する一つの基準としている。バビロン幽囚中に「わが安息日を聖くせよこれは我と汝らの間の徴となりて汝らをしてわが汝らの神

ハハバなるを知らしめん」(エゼキエル書二〇・二三)と言つてゐる。また安息日は神とイスラエルとの間の永遠の契約、徴であると考えられた。(出エジプト記三一・一六—一七)割礼同様、重要な社会生活の規定であり、この日に仕事をする者は民の間から断たるべし(出エジプト記三一・一四)というほど嚴重な契約であつた。いわばこの日は完全な taboo-day であつた。(G. F. Moore, 後掲書二卷二一頁以下)なお安息日 Sabbath はペロン捕囚中、ヘブライ人によつて Shabbat と呼ばれた。

③⑥ Baron : A Social and Religious History of Jews, Vol. I, p. 6.
③⑦ ヌダヤ人は現在でも一週の日曜日を安息日としてゐる。トムソンがパレスティナ旅行をした十九世紀後半はまだパレスティナのユダヤ人が、モーゼの教えたとおり第四日、六つ(正午)などという言い方をしたと記してゐる(W. M. Thomson : The Land and the Book, 1865, p. 64) ヌダヤ人の土曜日安息日制度から、キリスト教徒の日曜日聖日に変つたのは、日曜日(安息日の翌日)の朝、キリストが復活したことを記念してゐる。なおエダヤ人の安息日が夕方から始まるのは、「夕あり、朝あり、これ第一日なり」(官話訳では「有晩有早、就是一日」という創世記一・五、八、一三、一九、三二の記事に基づく。なおこの箇所の日を意味するヘブライ語(アラム語)の ereb が Europe (Abendland) の語源となつたといわれてゐる。

③⑧ Nathan Söderblom : Das Werden des Gottesglaubens, 2. Aufl. 1926. (三枝義夫訳「神信仰の生成」二八八頁以下)

③⑨ S. I. p. 58.

- ④⑩ このヘブライ語に厳密に該当する訳はできなるといわれているが、ルッター訳は *Ich bin, der ich bin*, モンフォート訳では *I will-be-what-I-will be*, 漢訳(文理)では「我自有而恒有」(同(官話)では「我是自有永有的」, 要するに永遠なる存在者、十三世紀から一般に誤つてヨハネ Jehovah 漢訳耶和華とよばれてきたがヤハウェ Yahweh が正しい)。
- ④⑪ 前世紀末、高山樗牛などがこの説をわが国にも紹介した。(高山林次郎「世界文明史」一八九八年、一一五頁以下)
- ④⑫ Morris Cohen: *The Meaning of Human Society*, 1947, p. 144.
- ④⑬ George Adam Smith: *The Historical Geography of the Holy Land*, 12th Edition, p. 113. *キツムの引用してラッターの言葉は* 'Die Natur und der Hergang der Geschichte zeigt uns das hier von Anfang an von keiner Zufälligkeit die Rede sein kann. -K. Ritter, *Ein Blick auf Palästina u. seine christliche Bevölkerung*.
- ④⑭ マックス・ヒューバー著 梶山力・大塚久雄訳「プロテスタントイズムの倫理と資本主義の精神」
- ④⑮ ヘブライ語では *melakhal' Cramer, Iudher* はそれぞれ *callings, Beruf* と訳した。宗教的な使命、経済生活上の職業両方の意味に用ゝられた。(Baron, *Ibid.*, p. 9) なお *ウエーバー* 前掲書一〇二頁以下。
- ④⑯ 創世記・出エジプト記・レビ記・民数紀略・申命記・ヨシヤ記六書を指す。創造から前一二〇〇ころのヨシヤのころまでの民族史、六書の最初の部分は予言者たちと同じころ活動した無名の作者) および E の手になるものが多く、多分 J はエダヤで、E は北方王国でこれを記した。前六二二年以後さらに申命記観点に
- 立つ D が加わり最後に P とよばれる祭司資料が生長していき、五世紀の半ごろこれら四資料がまとめられて六書が成立した。なおヨシヤ記から列王紀略までの成立は前三世紀ごろ、しかし旧約全部の標準的なヘブライ語聖書は紀元後二世紀まであらわれなかつた。(S. I. p. 108)
- ④⑰ 旧約聖書イザヤ書ヘレミア書などの予言書はヘブライ人の *Idolatry* の記事で満たされてゐる。
- ④⑱ たとえば *Karl H. C. Marti: Die Religion des Alten Testaments unter den Religionen des vorderen Orients*, 1907.
- ④⑲ *Bel* 元来はアラブのハバシス農業に関連のある農耕神、「ベールの灌ぐ土地」などの表現があり、一種の水神、のちエダヤに採用され、偶像崇拜の対象となつた。(W. R. Smith 著 永橋卓介訳「セム族の宗教」前篇一四〇頁以下)
- ④⑳ この中には *Metseba Mehuselah* のごとく九六九歳まで生きた長寿者もあり、生きたまま姿を消した *Enoch* のことき者もあつた(神かれを取りたまいければをらすなりき)。この箇所から寿命の長さのことを「*Metseba* のごとく」という言葉が出、*バーナード・シヨウ* はこれを題名にした戯曲を書いている。なお聖書に頻出する系図はいずれも J に属する。
- ④㉑ *George Foot Moore: Judaism in the Centuries of the Christian Era, the Age of the Tannaim*, 1931, p. 451.
- ④㉒ このため女のこと *Adam's rib* としう。通常、肋骨と訳されているが、原語 *sefa* はもつとデリケートな身体他の部分を指す場合にも用いられる。

⑤③ *ロ* ヲ書ク・一五一―二五 James Moffat 訳は 'I cannot understand my own actions : I do not act as I desire to act ; on the contrary, I do what I detest. (vers. 15) 等だ 'Thus, left to myself, I serve the law of God with my mind, but with my flesh, I serve the law of sin' (vers. 25).

⑤④ *ロ* ムンノ前書一五・四五一―四九。キノンツト訳は 'The first man, Adam, became an animate being, the last Adam a life-giving Spirit ; Man the first is from the earth, material ; Man the second is from heaven.'

⑤⑤ *メ* ノ記 (The Book of Job) は世界の文学書の最大なるもの一に数えられつゝる。前五世紀ヘルミア治下のパルステイナで書かれた。その第三八章に Pleiades, Orion, Mazzaroth (十二宮) Arcturus (北斗) の秩序などの記載があるほか、二八章には古代の鉱業にかんする興味深い叙述がある。なお John Owen が 'The Five Great Skeptical Dramas of History' としつゞけつゞるものは Prometheus vintus ; Job ; Faust ; Hamlet ; El magio prodigioso (S. I. p. 90)

⑤⑥ G. F. Moore, *Ibid.* p. 224. ヌダ王国滅亡後多数のヘブライ人(特に上級階級) がベビロニアに避難し、そこに定着した。その後の戦乱ごとに近隣地域やエジプトに逃れ、アレキサンダーおよびマセドニア王国時代にはパルステイナ以外に散在していたヘブライ人(テイアスボラ) は相等致に上つてゐた。いかに広く散らばつてもかれらはユダヤ人であるという気持を失わなかつた。

⑤⑦ Barou, *Ibid.* p. 9.

⑤⑧ ヌダヤ人の安息日遵守は嚴重をきわめた。週の第六日(金曜日)の夕方から、安息日に入るが翌土曜日の夕刻まで、一切の労働は禁止された。おもな禁止規則が三九条あり、これを分類すると百数十になり、さらに細かい規則を合すると総計一五二一もあつた。この規則のために安息日は安息日の意義を失ひ、この日には戦々競々として、その規則を破らないように腐心した。遠路を散歩することもやはり一つの労働 *mal'akah* であるとみなされ、週日なら大目に見られる落穂拾ひも、やはりメラカとみなされ、安息日には禁止された(マルコ伝二・二三)。病人のために医者を呼ぶこともできず、木に上ること、家畜に乗ること、水泳、手を打つことも禁止された。(G. F. Moore, *Ibid.* II, p. 21 ff.)

⑤⑨ 原始キリスト教では一定の教会はなく、信徒の家や適当な建物を利用して会合がもたれた。これを呼び集める意で *エクレシヤ* と呼んだ。

⑥① 原随園「新義西洋史」一二七頁以下。

⑥② シェロムのラテン語訳聖書は *ベツレヘム* において三八六―四〇四年にかけて完成した。シェロムはヘブライ語を知りその重要性をみとめた最初の *Latin father* だとされる。Vulgate はローマ教会で公認されている唯一の聖書であり、僧侶はこれを読む義務があり、信徒もこれを読むことが許されている。(S. I. p. 363, p. 486).

⑥③ John Herman Randall: *The Making of the Modern Mind*, p. 21.

⑥④ キリスト教史最大の event はキリストが人間の肉体をとつて生誕したことである。この年代は従来前四年とされたが、最近の研究

- 究 (たゝんば Calder: The Date of the Nativity, Isis, III, p. 453) とは前八年に於て、従つて愛難 Passion は二八年、パウロの回心 conversion は三〇年、伝道旅行が四五—四七、五〇年となる。(S. I. p. 236)
- ⑭ ヴェジニの説教集は九篇から成つてゐた。(四世紀後半) これ以前にも創造記の説教集が多数出てゐたが、この書物が最大の傑作とせられた。(S. I. p. 362)
- ⑮ Grant McCollay: Humanism and the History of Astronomy, in History of Science and Learning in Honour of George Sarton, 1944, p. 5. なる同書所収 J. Delorsky; L'Idée du Cycle Eternel Dans L'Histoire du Monde.
- ⑯ Ibid. p. 326.
- ⑰ J. H. Randall, Ibid. p. 18
- ⑱ Robert Young: Analytical Concordance to the Holy Bible, p. 210 に Dr. Hales の著書から引用した創造年代の variations がある。前四〇〇四年はイギリスの大僧侶 Visher により採用され、イギリスの聖書にも記されている。しかしルッターは三九六一、メランク톤は三九六四をあげ、十数種の年代がある。なおインド神話には六二〇四、アラビアは六二七四、メソポタミア一五八、シナ六一五七、ペルシア五五〇七などの数字もあげられてゐる。
- ⑲ J. H. Randall, Ibid. p. 24.
- ⑳ Kenneth Scott Latourette: A History of the Expansion of Christianity, Vol. I, p. 282. ロキヌスはマンキサンムリに生れ、聖地として大旅行者であつた。ヘイロンに於て行き、そのためかれの
- インギエニコという仇名が生れた。十七世紀に発見された主著のほかにも地理上の著作があつたが大部分散逸した。しかしかれはシナの実状を記したヨーロッパ最初の著述家であつた。(S. I. p. 432)
- ㉑ Siegmund Günther: Geschichte der Erdkunde, 1904, S. 30.
- ㉒ Cosmus: The Christian Topography (Hakluyt Ed.) p. 47 ff.
- ㉓ 従来の日本語訳では「エジプトの東の方」とあつたが、関根訳は「東の方エジプト」、モントット訳は In the land of Eden, to the far East. とあり、その意味は明らかである。
- ㉔ 創世記二・一〇—一四、四の河のラマ(㉔)ガムン(㉔)ガンジス、インドス、ダニユブ川(㉔)ギホン(㉔)ナイル川(㉔)エドケル(㉔)チグリス(㉔)ユーフラテス川という解釈がしばしばなされてゐる。
- ㉕ 創二・一〇の河 Hab. nahar は stream, Fluss の意、しかし細流、人工的運河の意にも用ゐられる。(出エジプト記八・一など) また単に河とつてユーフラテス、ナイル河を指す場合もあつた。これが混乱をまき起す根拠、G. アダムスミス前掲書六五七頁。
- ㉖ キリスト教思想家であるとともに、地理学に造詣の深かつた内村鑑三の著作にはエジプト、四つの河を問題にしたものが多い、その論文「エジプトの所在地」では「エジプト学、アッシリア学の起源は聖書にあるとし、エジプトについては Keil, Franz Delitzsch, Dilmann, Sayce, Friedrich Delitzsch, Hommel, Haupt などの諸説を比較し、かれ自身はエジプトはチグリス、ユーフラテス二大河の源なるアルメニア南部ウアン湖の付近にあつたとの説は容易に捨つべきではなすと語つてゐる。(内村鑑三全集第三卷、一四三頁)
- ㉗ Ellen C. Semple: The Geography of the Mediterranean Region.

1931.

② Augustin: *De la Genèse au sens literal* (*Œuvres complètes Tome IV, p. 243*). オーガスタヌスはこゝで、パラダイスの位置は人間の精神にとつて一つの謎であり、四河も文字通り解するのは不可能だと言っている。小野鉄二「地理学発達の史」(地人書館版地理学講座七六頁)では地上樂園と四つの河を地理学史の問題として取上げている。

③ ヨブ記一四章、ロマ書一・二五、八・一九、テモテ前書四・四、ヤコブ書一・一八に「造られた者」の代表的用例がある。ラテン語 *creatura* の原義は、一切の造られたものを指し、生物に限らな^く。Burton は *Anatomy of Melancholy* のなかで、アリストテレスの *Natural History* を *History of Creatures* と名付けたのは有名である。(William Aldis Wright: *The Bible Word-book*, p. 174)

④ 服部英次郎訳「聖アウグスティヌス告白」上巻一〇頁。

⑤ 長浜信寿訳「聖アンセルムスプロスロギオン」二三、二七、三二、一一五頁。

⑥ デカルト著、落合太郎訳「方法序説」(岩波文庫版)二三〇頁、デカルトによれば人間は神と虚無との中間者である。しかし人間の完全性を欠いていること自体は創造者たる神の責任ではない。(同書二二二、二三三頁)

⑦ スピノーザは神に酔える人であつたといわれる。神は万物の第一原因、また内存的原因であるが、人間に意志の自由はない。しかし有限者である人間も無限者なる神と合一する時に永恒となる。(波多野精一「西洋哲学史要」二〇五頁ほか)

⑧ たとえば *Thought on Religion*. Translated by Basil Kennet. など Pascal には *Misery of Man* (英訳) という題名の有名な *discourse* がある。

⑨ カント著波多野精一・宮本和吉訳「実践理性批判」二二六頁。たとえば齋藤信治訳「死に至る病」四五頁以下。

⑩ アブラハム語の *adam* は *the ground, firm* の意である。(Young: *Concordance*, p. 13). 元來は個有名詞でなく、普通名詞、ギリシア語の *άνθρωπος* は上を仰ぎ見る者、英語 *man* の原語、サンスクリット語の *manu* には考える人の意がある。(内村鑑三全集第三卷、六七頁) *homo sapiens* は文字通り *wiseman* の意味。
⑪ 原光雄「自然弁証法の研究」一四三頁。

附記 一人の地理学徒にすぎない筆者が、分限外の思想史の領域に足を踏み入れ、ほしいままの言をなしたことを読者諸賢に深くおわび申上げる。根本的な資料の多々あることも後で気付き、書き改める余裕のなかつたこともあわせておわびする。

centered on how the volume of Shinkan (信卷) was inserted later and, chronologically, how the procedure of description was taken, though certainly it occurred around the first year of Gannin(元仁). Discussions in both ways are based on Bandobon, i. e. the original copy. This article results from the author's two-year-long direct investigation of that copy. The article, though primarily bibliographical, is believed to take part in the above discussions.

In short, the Bandobon contains two parts, original and additional. So far historians have not distinguish these parts when they treat them as historical sources. Here the author has made clear the differences and intends to open a new way for the study of Kyogysohinsho.

Creation Theory in the History of Medieval Thought

by

Usao Tsujita

Genesis in the Old Testament was the foundation for the faith of medieval Europeans and that for their physical cosmic view. This creation story greatly influenced their minds and the belief in the creative God produced their consciousness as the created. This sort of consciousness, expressed in various forms, caused the minds of the medieval Europeans to be modest and decent. The main theme of this article is to trace the tradition of this modest spiritual trend. In this connection, however, the description covers the comparison of Genesis with the like creative myths among neighboring peoples in order to clarify its birth and structure, furthermore, the history of Judaism and the making of Catholicism through the acceptance of Greek thought by Judaism.

The Formation of Tohimondo (都鄙問答)

—An Essay on the Literary Sources of Shingaku (心学)
of Baigan Ishida—

by

Minoru Shibata

Shingaku (心學), established by Baigan Ishida(石田梅岩), is now-